

・
顔色を変えないことが
無罪の証拠

G・フローベール

二〇三〇年、五月五日、午後五時。

小林金助は、鎌倉の介護施設にいる。

足は思うように動かせないが、まだ、そう、まだ八十歳を越えたばかり。

介護なぞ要る身ではない、と自分では思っているものの、身寄りがいないので、「未来コスモス院」という、民間の介護施設に、四年前から入っている。

師である探偵麻暮正作の厚意により、金助には施設に入ることのできる大金があった。

山内参三が、超ベストセラー、

『死んだる団』

の印税を一部前借りして、麻暮に大金をわたした。

その金の大半を、麻暮は金助名義にしておいてくれたのである。

金助の足は、老化で衰えたものではない。

十年前、木下弁太郎を倒した際に、死に物狂いの木下に、両足の半月板をやられたのだった。

「あの世の麻暮のだんなは、あちきがこうして、まだ生きているとは、ちっとも思っていないだろうな」

つぶやきながら金助は、麻暮正作のことを回想するたびに、目の前が曇る。

曇って、なにも見えなくなる。

「男は死ぬ直前でも弱音を吐くものではない」

「男は愛する人を亡くしても涙を零すものではない」

そう麻暮に教えられてきたので、これを涙のせいだと認めたくない。

それで、担当介護人のタナカを、ベルで呼んだ。

「何か、御用デスカ、小林サン」

タナカは今日は、黄色いTシャツと青いパンツ。

「あちきは、眼が見えにくくなったぜ」

金助はタナカに、いつもどおり弱音を吐いた。

「ワカリマシタ、眼科ニ、イキマシヨウ」

「癌ではなくって、眼だよ」

「デスカラ、眼科、イエ、目医者ニ、イキマシヨウ」

「最初からそう云えばいいのさ」

金助はタナカを睨む。

タナカは顔色ひとつ変えない。

最近のロボットには、顔色は変えられなくとも、声色を変えるものがある。

あいての声調を器械が解釈し、ここで変えたほうがいいという判断をし、無理矢理変えて変な声を出す。

だがタナカは、ベテラン介護人であるから、旧式なのだ。

相変わらず淡々とした声を出す。

「ハイ、失礼イタシマシタ」

この施設では、人間とロボットを区別も差別もしない。

だから、介護ロボットと呼ばず、介護人と呼ぶ。

タナカは金助の身体を、丁重に車椅子へ運ぶ。

腕力は人間の約五倍、知力は人間と同様、それでも感情がないから、いや、あるかもしれないのだが、極端な喜怒哀楽はないから、介護されるほうは、同情も憐憫もされないのが気が楽なのだ。

「タナカ君、すまんねえ、あちきの冗談だったんだ」

金助は素直に頭を下げる。

「冗談ダト、眼ガ、ミエナクナル、ノデスカ」

「いや、眼が見えにくくなったのは、眼が悪いからではねえんだ」

「ナルホド、ソレハ、ヨカッタ、デスネ」

「タナカ君は、飲み込みがいいから、助かりませ」

しかし、飲み込ますために、言葉がひとつ余計に要る。

「デモ、ドウシテ、眼ガ、ミエニクク、ナッタノデスカ」

「昔のさ、あちきの師匠を、思い出しちまったのさ」

正直に云った。

「ソレハ、ソレハ、師匠トハ、親分、デスカ」

「まあ親分でもいいか、とにかくあちきの総てだった人さ」

「ソレハ、ウラヤマシイ。

スバラシイ、人ナンデスネ」

「素晴らしい、素晴らしく優しく、素晴らしく恐ろしい、ってもんさ」

あの素晴らしさ、あの優しさ、あの恐ろしさは、言葉で云っても解らないだろう。

「ソレナラ、ワタシノ、親分ニモ、ニテイマスネ」

「へえ、タナカ君にも親分がいるんかいな」

「ハイ、ロボット派遣ノ、親分デス」
「ロボット派遣会社の社長なら、あちきも聞いたことあるなあ。
川上さんだったか木下さんだったか」
「川上サンモ、木下サンモ、部長デス」
「なら、社長は何ていうんだい」
「ソレハ内緒デス、トイウヨリ、ワタシハ、シリマセン。
社長ト、イツモヨンデイマス。
小林サンノ、親分ノ、オ名前ハ」
「麻暮正作先生よ。
半世紀前には、その名を知らねえもんはなかったがね」
「ワタシ、シッテイマス。
麻暮先生、ワタシノ、社長、トキドキ、ソノ名前、ツブヤキマス」
「まさか、タナカ君の社長が。
それは、つまり、どういうことなんだろう。
丁度いい、ついでだから、このまま社長のところへ行こう」
金助には何か、何か云い知れない予感があった。
具体的には云えない、漠然とした予感が。
「社長、人間、キライデス」
「あちきも人間は嫌いだ。
だからタナカ君を指名している。
社長とはウマがあいそうだよ、一緒に行ってくれえな、タナカ君。
会社は江ノ島だろ、あちきの庭みたいなものだが、車椅子じゃかったるい」
「オ客様ニ、ソウイワレテハ、コトワレマセン。
今日ハ、モウオソイデスカラ、明日ノ朝、ココヲデマショウ。
外出ノ、手続ト段取モ、シテオキマスノデ」
「今日は端午の節句、男同志の約束だぜ」
「スミマセン、ワタシハ実ハ、女ナノデス。
ツイデニイウト、ベテランデモ、ワタシ、ワカイ女デス」
「げっ、タナカ君、女だったのかい」
ロボットに男も女も、若いも年寄りもない気がしたが、金助はわざとらしく驚いて見せた。

六日、午前八時。

小林金助は、車椅子で未来コスモス院を出て、介護ロボット派遣会社である「未来計画カンパニー」に向っている。
後ろでタナカが押してくれるから、楽なものである。
江ノ電鎌倉駅で乗って、江ノ島駅まで。

それでもたいした時間はかからないが、麻暮のだんなの、飛ぶ車椅子なら、ひとつとびだと思った。

あの車椅子で、麻暮のだんなは、荒野大三郎の、

【オバケクラゲ】

を退治したのだ。

思い出に耽りながら、金助は、未来計画カンパニーの部長だと云う、川上と木下という名前にひっかかった。

まさか、まさか荒野の両腕だった、川上宙衛門と木下弁太郎じゃあるめえな。

しかし、川上はすでに六十年前、麻暮のだんなによって、木下は十年前あちきによって、亡き者にされたはず。

まさか、その子供か孫なんてことはあるめえな。

そうだとしたら、荒野の子供か孫が、現れるってこともなきにしもあらずか。

そんなことを漠然と考えながら、金助は湘南の海を電車の窓から眺めていた。

いつ見ても何度見てもいい。

電車内にいても、風を感じる。

タナカも金助と同じ方を向いていた。

電車は珍しく混んでいたが、このあたりでは車椅子もロボットも珍しくはないので、両者には無関心だった。

なんとなく金助は、心の中で頼れる人物を求めている。

とにかく金助の総てだった、麻暮正作は亡い。

金助の弟の勘助は、刑事山風順一の手先として、一九七〇年に活躍したが、山風亡き後、急に元気がなくなり、まだ二十代なのに、いわゆる「突然死」してしまった。

山内参三は、葉山の別荘に居るはずだが、近場なのでなんとなく安心感もあって、連絡はとっていない。

それでもギネス級の高齢のはずだから、余計なことは頼めない。

有名人だから、亡くなったら新聞に載るはずだが、まだ載っていないのは嬉しくもあった。

舟木英介は健在とのことだが、噂によると家族一同で鵜沼を離れ、ハワイに移住したとのこと。

花井勇太が脳硬塞で亡くなったことは、だいぶ前に山内参三から聞いた。

弟の山風健太の消息は聞かないが、自分より幾らか年上だから、いくら頑健自慢と云っても心配ではある。

もしかすると、もう鬼籍に入っているかもしれない。

いささか心細くなっている金助は、麻暮正作が、目と鼻と口だけが見える渋色の鉄仮面を付けた麻暮正作が、海の中から忽然と姿を現すのではないかという感覚に、武者震いを覚えた。

「ツキマシタヨ、江ノ島デス、小林サン」

「よっしゃ、頼むぜ」

六日、午前九時。

小林金助とタナカは、江ノ島にまで架かった橋の上にいる。
江ノ島の右端の海岸沿いに、超豪華すぎる、建築物が見える。
最近はラブホテルもここまできたか。

金助はそうは云わずに、

「江ノ島も変わったな。竜宮城がある」

タナカの反応は、金助には意外だった。

「アレガ、未来計画カンパニーデス。コノ橋ヲワタレバ、アソコマデ、ウゴク舗道ニナッテイマス」

六日、午前九時半。

小林金助とタナカは、未来計画カンパニーの正門前にいる。

「うへえ、近づくと、こりゃあ、まるで、都庁だな」

「ワタシモ、ソウオモイマス、ケレドモ、社長ハ、セマクテ、チイサクテ、ゴメンネ、トイイマス」

「タナカ君たちに気を使う社長たあ、珍しいよなあ」

「社長ハ、トテモ、ヤサシイ、誰ヨリモ、ヤサシイ」

「そうかい、麻暮のだんなより優しいかどうか、見ものだけ」

金助は車椅子から降りて、歩き出さんばかりの雰囲気だったが、タナカが押しとどめた。

「小林サン、ハリキリスギルト、血圧、アガリマスヨ」

「余計なお世話じゃい。」

あちきは、ぽっくりいきたいんだから、血圧あがるの大歓迎」

「小林サン、ポックリイクト、ワタシ、仕事ナクナリマス」

「嘘いえ、あちきが死んでも、いくらでも仕事はある。」

いまや介護ロボットの天下だよ、選挙に出たら、当選しちまう」

「ロボット、マダ、参政権、アリマセン」

「冗談だがよ、あと百年も経ったら、そうなるかもしれねえなあ」

「ウレシイデス、ワタシハ、総理大臣、メザシテマス」

「アメリカじゃあ、とっくに黒人が大統領、ヨーロッパじゃあ、とっくに女が首相。」

日本じゃあ、いずれロボットが総理大臣かい、目出てえ、目出てえ」

巨大な回転ドアから車椅子が入ると、金助は、言葉に表せない奇妙な気に包まれた。

霊気、幽気、妖気、すぐにそんな言葉が浮かんだが、どれもが似てはいても、ど

れもが当たっているとは思われなかった。

「おいおい、空調がおかしくはねえかい」

すこし振り向いてタナカに云うと、

「ロボットハ、何モカンジマセン、シカシ、ロボット、湿気ニ、ヨワイカラ、乾燥、シテイルカモ」

「いんや、その逆だぜ」

「デハ、担当ノモノニ、連絡シマス」

タナカは、いくつもある胸のボタンの、ひとつを押した。

「社長さんにもな」

「社長ハ、ワタシノ行動、ミンナ、ワカッテイマス」

「まあそうだろうな、不思議はねえやな」

と云いつつ、金助は首を縦にふった。

総ての介護ロボットには、GPS機能が付いているし、本社の基本コンピュータと会話も繋がっている。

介護ロボットが何を云ったかのみならず、介護ロボット相手の被介護者の台詞も文字となって出て来る。

昨年までは音声だったのだが、うるさいので文字に変えた。

介護ロボットと接している間は、介護される人間のプライバシーはないのだ。

にもかかわらず、ひとつも文句を云う者がいないのは、それが自分の安全を守ってくれているからだ、納得しているからである。

タナカと金助はエレベーターに乗った。

ガラス張りのエレベーターで、十三階まで行った。

箱から出ると、百坪ほどのシンプルな一室で、調度は何もない。

コンピュータや従業員は、地下も含めた別のフロアなのだろう。

ひとりだけいる。

窓から外を見ている。

青いタオルで頭を包み、赤いジャージの上下と、白いスニーカーなので、掃除夫だろうと金助は思った。

「社長、小林サンガ、イラッシャイマシタ」

ジャージの掃除夫が振り返った。

金助は心の中で、げげげっ、とおもわず声をあげた。

掃除夫ではない、社長だった。

しかも人間ではない、ロボットだった。

しかも黄金の顔。

タナカは銅製だが、社長は純金製なのだろう。

「コレハコレハ、小林金助君、ヒサシブリデスネエ。

プフイ」

その声を聴いたとたん、金助は、

「げげっ」

と発したなり、愕然として、もう声が出なかった。

「君たちニトッテ、オゾマシキ、私ニトッテ、ウツクシキ

【自殺請負所】

ハ、金助君ニ破壊サレマシタ。

麻暮サンイワク、

【オバケクラゲ】

ハ、麻暮サンニ破壊サレマシタ。

プフイ」

金助はまだ声が出ない。

ただ喉の奥で、

「荒、野、大、三、郎」

と唸っていた。

当たるはずのない予感が、当たったのだ。

声が出ない金助の聞きたいことを、荒野ロボットが代りに云ってくれる。

「私ノ両腕、川上宙衛門ハ、麻暮サンニコロサレ、木下弁太郎ハ、金助クンニコロサレマシタ。

ケレドモ、私ニハ、ソノ兩名ヨリモ優秀ナ、兩名ノ息子タチガオリマス。

コノ未来計画カンパニーノ部長デモアル、科学者ノ川上宙門君ト、医学者ノ木下太郎君デス。

コノ兩名ガ、粉微塵ニナッタ私ノ脳味噌ノ、欠片ヲ採取シテ、保管サレテイタ、スペシャルDATAト、スペシャルDNAト、照合シ、コノ不死身ノ身体ヲ、ツクッテクレタノデス。

デスカラ、私ハロボットデアルトトモニ、クローンデモアルノデス。

オヤオヤ、金助君ノ表情カラサッスルニ、私ガ今度ハ、何ヲタクランデイルノカ、ソレヲシリタイヨウデスネ。

何モタクランデナンカイマセン、コノ地球ヲ、老齡化シタ地球ヲ、スクイタイ一心ナノデス。

プフイ」

信じられない、と内心金助はおもった。

荒野が未だ存在すること、そしてその荒野の言葉。

あまり思案したことのない金助だが、麻暮のだんななら何と云うだろうと、素早く思案した。

きっこう云うだろう。

『金ちゃん、荒野の云うことなんか、信じられないよん。』

ケケケ、今度は、老齡化対策とかなんとか口実つけて、日本中の老人を、まとめて抹殺するつもりだろうよ。

そのための布石が、未来計画カンパニーというわけさ』

金助は長年、麻暮正作の云うことなら何でも信用し、云うことを聞いてきた。

そうして行動した。

けれども、今や麻暮は亡く、当然指示もなく、どう行動してよいのか解らない。
それに、何をすることもこの身体ではどうしようもない。

しかも介護人は、荒野の子分のロボット、タナカ君だ。

「金助君、何かイッテクダサイ。

私ハ、ロボットニカコマレタ生活デスカラ、人間ノ言葉ニ、ウエテイルノデスヨ。
プフイ」

それでも金助は何も云わなかった。

この場合、この立場では、沈黙は金だ。

「モシカシテ、命ノ危険トカ、オモッテイルノデハナイデショウネ。

ソレハ杞憂デス、ナゼナラ私ハ、永遠ノ命ヲサズカッテ、人間ガ完全ニ、カワッ
テシマッタノデス。

私ハ、今ヤ荒野大三郎デハ、アリマセン。

マシテヤ、松本玄信デモ、北山極斎デモ、日下典禪デモアリマセン。

イワバ、名無シノ権兵衛、単ナル社長兼掃除夫ナノデス。

プフイ」

金助は益々声が出なくなった。

自分が掃除夫だと勘違いしたことを、荒野は解っているのだ。

(相変わらず恐ろしい男だ)

そのとき、タナカが声を出した。

「社長、小林サンハ、気分ガワルイヨウデス。

未来コスモス院ニ、モドッテモ、ヨロシイデショウカ」

「勿論デス、タナカ君ノ判断ニ、金助君モ、異論ハナイデショウ。

プフイ」

助かった、と金助はおもった。

六日、正午。

小林金助とタナカは、すでに未来コスモス院に戻っている。

タナカが昼食を持って来た。

「ハイ、小林サン、ゴ希望ドオリ、ラーメンデス」

「ありがとうよ。ラーメンしか喉に入らねえ」

と云いながら金助は、旨そうにラーメンを啜る。

「小林サン、社長ト、顔ミシリ、ダッタノデスネ」

「顔見知りなんてもんじゃねえ」

「社長ハ、ヤサシイ人デショウ」

「タナカ君にとってはね、あちきにとっては」

「小林サンニ、トッテハ」

「おそろしい人さ」

「ソレハ、初耳デスネ」

「当たり前よ、社長が荒野大三郎とは知らなかったんだからな。

知らない人のことは何にも云えん。

けれども荒野大三郎のことだったら、何でも云える」

「社長ハ、荒野大三郎、トイウノデスカ」

「そうだが、それ以上のことは云えねえ。

この会話、みんな社長に筒抜けなんだろう」

「ソレハ、最終管理責任者デスカラ」

「なんかさ、タナカ君、社長に云わされている感じなんだよな」

「ソナナコトハアリマセン。

ワタシハワタシノ、脳味噌コンピュータ、アリマス」

「それにさあ、社長の、ぷふい、ってやつ、ありゃあ一体なんだい」

「アア、アレ、タブン、癖デショウ。

モシカスルト、高級ロボット特有ノ、オナラ、ミタイナモノカモ」

「まあいい、社長のことは、もうおしまい。

あちきは、麻暮正作先生のことを思い出していたんだ。

麻暮のだんなに、報告すべきことができたんでね」

荒野に聞こえるのを、逆手にとって云った。

麻暮のだんなが活着していると、勘違いしたかもしれない。

もしそうなら、荒野の心の中には、嵐が吹き捲くっているだろう。

金助はラーメンを一気にたいらげた。

周りを見回した。

どこかに連絡したかった。

が、どこに連絡してよいかわからなかった。

そこで、麻暮の遺品のなかから持ってきていた、

〈探偵手帖〉

に備え付けられている、アドレス帳をチェックしてみることにした。するとそこに、山風健太元刑事の自宅の電話番号を、すぐに見つけることができた。

山風健太は、花井という姓だったが、先輩刑事の故山風順一のひとり娘と結婚して、婿に入った。

いまごろは亡くなっているかもしれないが、十年前までは兄の故花井勇太と共に元気だった。

麻暮いわく、

【オバケクラゲ】

の住む洋館へ、麻暮と共に乗り込んだのだった。

「よし」

と金助はちいさく叫び、スマホを握りしめると、車椅子を自分で動かして、ロビーまで行った。

六日、午後一時。

小林金助は、山風健太の自宅に電話をかけている。

コールが長く続き、ようやく老婦人の声がした。

「山風でございますが」

よかった、電話番号は変わってはいなかった。

「初めてお電話しますが、あちきは以前、山風健太さんにお世話になった、小林金助という者ですが」

「あらまあ、小林金助さまなら、主人から聞いておりますがねえ」

それは好都合、と金助は声を出しそうになった。

「それは、その、あの、どのように」

「麻暮正作さまと小林金助さまは、主人の味方だと聞いておりますがねえ」

「そうですか、それはどうも光栄です。

ところで、失礼ながらご主人は、ご健在でしょうか」

「まあ九十近い割には、健在のほうなのでしょうねえ。

平日は、スポーツジムのなかにある、リーズナブルなマッサージ室に通っています。

とにかく仕事柄、足腰に負担ばかりかけてきたものですからねえ」

「そうですか、小林が少なくとも百まで生きてほしいと云っていたと、よろしくお伝えください」

金助が電話を切ろうとすると、

「わざわざお電話くださるには、なにか特別なお話があるのではないですか。

たとえば事件がらみとか。

もしそういうことなら、自分は惚けはじめているから、息子に連絡してもらおうよ、主人からは常々云われておりますがねえ」

「息子さんですか」

「息子と云っても、還暦に近い歳ですがねえ。

とにかく父が刑事、主人が刑事、息子だけは普通の会社員にと、かんがえていたんですが、三代目になってしまいました。

いまは鎌倉署なので遠いんですが、ずっと一人身ですから、ずっと同居をしております。

署長で、山風健一と云います」

鎌倉署と聞いて、しかも署長と聞いて、これは奇遇だ、これは絶好だと、金助はなんだか、ときめきを抑えられない気分になった。

「わかりました、それでは頃合をみて、遠慮なく連絡させていただきます」

電話を切って、金助は大きく深い呼吸をした。

六日、午後三時。

山風健一は、鎌倉署の署長室にいる。

父の健太が関わった、

【鎌倉山・洋館事件】

がなければ、鎌倉署への異動を受けなかったかもしれない。

いま山風は、母親からスマホに入ったメールを、再度確認している。

〈小林金助さんから、何かわけありの電話がありました〉

という内容である。

小林金助という名は、麻暮正作、山内参三、舟木英介らと共に、信用のおける人物だと、父親から聞かされている。

腕組みしたとき、内線で電話がはいった。

小林金助からだった。

簡単な挨拶ののち、金助がこう云った。

「江ノ島の未来計画カンパニーの社長は、なんと鎌倉山の洋館のあるじなんです。

荒野大三郎め、こんどは、

【オバケクラゲ】

ではなく、ロボットだか、クローンだかで現れたんでやんす。

まさか荒野に再会するとは、夢にもおもいませんでしたよ。

一目、ロボコップでもなけりゃ、退治はできないと解りましたぜ」

山風は、背筋がのびる感覚を味わいながらも、

「ロボットかクローンになっている社長が、荒野氏が、何かしでかすという、証拠、いや予感があるのですか」

「おおあり、おおありですね。

奴が何をかんがえているか、一般人には解りませんが、あちきの予想もつかないことをやらかすはずですよ」

「しかし何か具体的な物証がありませんと」

と云いながら山風は、父から聞いた荒野の言葉を思い出していた。

『山風サン、御安心クダサイ、コノ塔ト槽ガ、破壊サレテモ、スペシャルDATAト、スペシャルDNAガ、アリマス、ソレガアレバ、イツデモ私ハ、再生可能、ナノデスヨ』

「それはそうですが、そういうものなしにやらかすのが荒野ですからねえ。

オウム真理教がやらかした、

『地下鉄サリン事件』

だって、あちきに云わせれば、警察が甘く、後手後手になったから、あれほどの大事になったわけだし」

「はあ、それは認めますが、しかし」

「動けませんかねえ」

「いえ、どう動いたらいいか、検討してみます。

あの竜宮城みたいな未来計画カンパニーが、ただものでないことは勘付いていました。

でも、小林さんに云われるまでは、まさか荒野大三郎の復活とは、思いもしませんでした」

「そうですか、よろしく願いしやんす。

あちきもあちきなりに、動いてみましょう」

金助の電話が切られた。

六日、午後四時。

小林金助は、未来コスモス院のロビーで、まだ考えこんでいる。

金助は、自動販売機で缶コーヒーを買った。

缶コーヒーが落ちる鈍い音を聞いたとたん、金助はおもわず掌を打鳴らす。

そうだ、そうだった。

探偵から出版社経営に転身した舟木英介が、家族一同で鵜沼を離れ、ハワイに移住したという噂を聞いたとき、舟木が鵜沼の邸宅を、後輩の腕利き探偵に、安く譲ったということも聞いたのだった。

たしか郷田という中年の探偵で、そこを探偵事務所として使っているとのことだった。

缶コーヒーを飲みながら、金助はスマホで、鵜沼の探偵事務所の電話番号を調べ始めた。

六日、午後五時。

探偵郷田狂介は、鵜沼の、

「郷田探偵事務所」

で、壁に架けた三枚の写真に見入っている。

原宿の探偵事務所を、ここに移して三年になる。

仕事は順調だったが、原宿がすっかり若者の町になってしまったのでつまらなくなり、また依頼もすくなくなり、引退を考えていたときに、大先輩の舟木英介から鵜沼に来ないかと声が掛かったのだ。

おかげでいまは、湘南セレブの離婚問題や浮気問題の調査で、忙しく愉しくやっている。

三枚の写真は、右から順に、

〈舟木英介〉

〈麻暮正作〉

〈木場完蔵〉

である。

郷田探偵にとって、尊敬する舟木探偵は、郷田が探偵稼業に入ったときの、「日本探偵協会」

の会長であり、大先輩であり、恩人である。

郷田は本名は郷田京太郎なのだが、舟木英介の一字を勝手に貰って、郷田狂介と名のっているのだ。

京都が好きなので、京の字はしばらく残しておいたが、仲間の探偵から狂の字が似合うと云われて、じゃそうするかと、慌てる仲間たちを無視して、そうした。

また、麻暮探偵は、憧憬の対象である。

会ったことはないが、

「世界一の探偵」

「探偵の神様」

だと考えている。

しかし、写真は、

「鉄仮面」

の写真であり、素顔は見たことがない。

舟木と麻暮が活躍した、

【死んだる団事件】

は、郷田にとって、すでに伝説である。

一方、木場探偵は、盟友であり、

「探偵チャンピオン大会」

を争ったライバルでもある。

「日本一の探偵」

の称号は、木場が取ったが、木場の方は、

「ホントは狂ちゃんが日本一の探偵だよ」

とずっと云ってくれていた。

木場は末期癌ながら、難解な、

【蟹路地殺人事件】

を解決し、その犯人である、

「両脚のない娼婦キンカ」

とカンボジアに逃げて、連絡も断った。

不死身の木場のことだから、癌に打ち勝ち、カンボジアで幸せに暮らしていると、郷田は勝手に確信している。

三枚の原寸大の顔写真の上に、日本探偵協会の、

「探偵十訓」

の看板が掲げられている。

[一、礼に始まり礼に終わる。

二、言葉や態度を乱さない。

- 三、例外のあることを忘れるな。
- 四、親といえども絶対秘密。
- 五、必勝は平素の鍛練から。
- 六、郷に入れば郷に従え。
- 七、探査には念を入れる。
- 八、服装は心まで。
- 九、直接調査を避ける。
- 十、よく咀嚼して結論を出す。]

郷田狂介は、朝の仕事始めに、この三枚の写真を眺め、探偵十訓を唱え、また夕の仕事納めに、同じことをするのを日課にしている。

そろそろ消灯して、二階の居間に移ろうかと思っていると、事務所備え付けの電話が鳴った。

依頼人には毎度スマホの電話番号を教えているから、この電話が鳴るということは、新しい客の可能性が高い。

鵜沼に移ることを拒んだ原宿最良の家族からも、懇意にしている鎌倉署の山風健一署長からも、連絡はスマホにくる。

「はい、何でも解決、郷田探偵事務所で一す」

「あのう、あちきは、小林金助とって、ごぞんじないかもしれませんが、十年前まで、探偵麻暮正作先生の手下をやっていた、三下やっこであります」

おおっと、郷田は、椅子からひっくり返りそうになった。

郷田にとって、麻暮正作が神様なら、小林金助は神の子である。

「ごぞんじないどころではありません。

あああ、あら、あたしとしたことが、興奮しちまって、どどど、どうしましょう。

いいい、ごごご、ご依頼でしょうか、はいはい、はいは一回でいいですよ、大丈夫ですよん。

こここ、小林さん、あたし、こんなにうろたえていても、仕事はきっちりやりますから」

郷田は探偵十訓のその二を、すでに破っている。

「それはそうだと信じていまっせ。

あの舟木さんが太鼓判を捺した、有能な探偵さんだと聞いておりますから。

じつは、江ノ島の未来計画カンパニーのことなんですがね」

「そうですか、お会いしてお話をお聞きしましょうねん。

で、小林さんは、いま、どちらに」

金助から、未来コスモス院の名を聞くと、郷田は、

「これから伺います」

と云って電話を切った。

なにやら、無性に武者震いがした。

ネクタイを締めるのももどかしく、締めるのは他にありそうだとおもいつつ、郷

田はジャケットをはおっただけで飛び出した。

六日、午後六時。

郷田狂介は、鎌倉の未来コスモス院に向けて、愛車のBMWを走らせている。
スマホに電話がきた。

鎌倉署の山風署長からだ。

こちらからかけなおす旨を伝えて、いったん車をコンビニの駐車場にとめた。
コンビニに入って、金助へのみやげとして、数種類の栄養ドリンクを購入し、せわしなくキャスター5ミリを一本喫い、それから山風へ電話を入れた。

「すみませんねえ、あたし、車のなかだったの」

「こちらこそすまない、多忙な探偵さんに電話なんかして。

じつは、先ほど、小林金助さんから自宅に電話が入って」

「じつは、あたしもそうなの。

それで、これから未来コスモス院に会いに行くの」

「あそこで大丈夫かなあ。

なぜって、あそこの介護ロボットは、みんな未来計画カンパニーからの派遣だろ。

あそこで会談したりしたら、筒抜けじゃないかなあ」

「まだ何も聞いていなかったけれど、未来計画カンパニーの話なのね」

「そうそう、あそこの社長が、驚いたことに、かの荒野大三郎だっていうんだ」

郷田は息をとめた。

荒野大三郎のことは、舟木から何度も聞かされていた。

山内参三の超ベストセラー、

『死んだる団』

を何度も読み返している。

「信じられないけれど、それが本当なら簡単じゃないわねえ」

「残念ながら、まず本当だろうな。

小林さんがその目でたしかめたというんだから」

「それで、署長は、どう考えているのよん」

「どうって、それこそ簡単じゃないわけさ。

だから、郷田さんに相談しようとおもってね」

「あたし、ここ十年、浮気調査しかしてないからさあ。

ともかく、小林さんに会って、それから考えてみるわ。

考えがまとまったら、協力あおぐかもしれないから、連絡するわね」

「ああ、どちらにしても、連絡ほしいね。

もしかすると、相手が相手だけに、雁首つきあわしたほうがいいかもしれん」

「ええ、そうするわ、三本の矢ね」

六日、午後七時。

郷田狂介は、小林金助の個室にいる。

ひととおり話も聞いた。

郷田は、念のため（口では云わず）自分の手帳にコメントを書き、一枚破って金助に手渡した。

[小林さん+山風署長+私。

鎌倉小町通りの、喫茶店〈帰路〉で、会うことにしましょう。

期日、時間等は、山風さんの都合も聞いて、明朝、メールでご相談申し上げます]

金助も黙って頷いた。

しばし麻暮正作に就いての金助の話を聞いていると、タナカがやってきた。

「あれ、タナカ君、呼んでないけど」

と金助が云うと、

「ヨバレテイマセンガ、用事ガアルノデ、失礼シマス」

「それはご苦労だね、何の用事かな」

「小林サンノ面会ニ、郷田サンガ、ヤッテキマシタ。

ソノコト、社長ノパソコンニ、ハイリマシタ。

ソレデ、社長カラノ、メッセージデス。

郷田サン、ゼヒ未来計画カンパニーニ、オイデクダサイ」

「そうか、そうきたか」

金助は郷田を見た。

郷田は全く動揺することもなく、黙って頷いた。

七日、午前九時。

朝食を終えた小林金助は、未来コスモス院のロビーで、スマホを片手に、郷田狂介からのメールがくるのを待っている。

窓の外は五月雨だった。

ロビーの壁に据え付けられた、巨大液晶テレビでは、朝のニュースをやっている。

他に見るものもないので、金助は何気なくテレビを見ている。

〈宗教団体にも税金を課す法律〉

が、与党で検討されているというニュースであった。

金助は十年前（2020年）を思い起こした。

まったく、ひどいひどい年だった。

命は取り留めたが、まる半年の療養。

あの事件に関わったために、夏の、
〈東京オリンピック〉

も楽しめなかった。

女子水泳のファンなのに。

あれ観ていると興奮するのに、変な意味ではなく。

それにしても、荒野大三郎が生きているなんて。

あれを生きていると云うならば。

荒野が生きているのなら、麻暮のだんなが死んでしまったと、信じるわけにはいかねえ。

金助は、初めて会った郷田狂介探偵を見たとき、もしかして麻暮正作の生まれ変わりではないか、と感じた。

容貌も声音も似てはいないのだが、雰囲気はじつによく似ていた。

そう、オーラが。

狂気のオーラ。

このとき、郷田からメールがきた。

[本日午前中／未来計画カンパニーで荒野に会います／どうなるか解りませんが午後1に〈帰路〉で待ち合わせしましょう／山風署長も来ることになっています／ご都合はいかがでしょう？／雨がやまなければ無理をすることはありません／小林さんへ郷田より]

[了解しました／大丈夫です！]

と、金助はすぐに返信した。

七日、午前十一時半。

郷田狂介は、未来計画カンパニーの十三階で、荒野大三郎と対面している。

「郷田サン、サッキカラ、私ノコトヲ、荒野トヨンデイマスガ、私ハ荒野デハアリマセン。

単ナル社長兼掃除夫ナノデス。

デスカラ、私ハ探偵ニモ警察ニモ、ツカマルコトハナイノデス。

私ハマダ、善ナルコトシカ、オコナッテハイマセンカラネエ。

イママデモ、ソシテコレカラモ、私ハ善ナル者ナノデスヨ。

プフイ」

「そうでしょう、そうでしょうとも。

あたしは、探偵ですが、疑い深くはありません。

あたしはただ、探偵ですから、真実が知りたいだけなのよん」

「アナタハドコカ、麻暮サンニ、ニテイマスネ。

麻暮サンニ、ニテイルトイウコトハ、私ヲホロボス気配ガ、カンジラレルト、イウコトナノデス。

プフイ」

「とにかくお会いできて良かったです。

あたしはこれで失礼しますが、あたしをやっつけたいなら、いつでもお待ちしておりますいまからねん」

郷田は、名刺を渡して一礼した。

「変ナ人デスネエ。

プフイ」

その声を背にして、郷田はエレベーターに乗った。

玄関を出ると、あらためて未来計画カンパニーのビルを見上げた。

雨はあがり、竜宮城を想わせる建造物の上階は、濃い霧に包まれていた。

その霧は、いまの郷田にとって、なにかの象徴とおもわれた。

郷田は駐車場に向かいながら、キャスターの5ミリを口に銜えた。

七日、午後一時。

鎌倉署署長、山風健一は、鎌倉小町通りの喫茶店〈帰路〉にいる。

紺のスーツに紺のネクタイ、泰然としてブレンドコーヒーを飲んでいる。

四人掛けのテーブルの上には、山内参三著の、

『死んだる団』

が、カバーもかけずに置かれている。

マスターの立原正男がそっと声をかける。

「署長さん、待人来たらずですか」

「いや、必ず来るから、待っているわけではない」

山風は、郷田が一度も約束を破ったことがないのを知っている。

おそらく、この霧で渋滞しているのだろう。

まさか、未来計画カンパニーでなにかあったわけではなからう。

やはり郷田は慌てて入ってきた。

「ごめんなさい、偉い人をお待たせしちゃって」

「偉ければ時間前になんかこないよ」

山風は少々安堵して微笑んだ。

そのとき、金助の車椅子が窓の外に見えたので、山風は立って出迎えに出た。

「すいませんねえ、車輪のやつが滑っちまって」

金助はすまなそうだったが、タナカの助けを借りずにここまで来たことに、いささか興奮もしていた。

「ここ、すぐに解ったかしら」

と郷田が声をかけると、

「コンビニとかファミレスとか、小町通りもずいぶん変わったけど、おそらく昔ながらの雰囲気のお店だと思っていたんで、すぐに見つかりましたよ」

「雨があがってよかった」

と山風は云って、金助の車椅子をテーブルに導いた。

七日、午後一時半。

郷田狂介、山風健一、小林金助の三人は、〈帰路〉で談笑している。

麻暮正作のこと、舟木英介のこと、山内参三のこと、山風順一、山風健太、花井雄太のこと、小林勘助のこと、木場完蔵のこと、それから。

話はずきずき、ときどき、山内参三の本、

『死んだる団』

を手にして、ページをめくっては、また談笑。

昔ばなしは、いくら悲惨なものだろうと、懐かしい。

他に客はいない、いるはずがない。

マスターの立原が、入口に、

〈只今貸切り〉

の札をかけてしまったのだから。

「すまないねえ」

と山風がカウンターの中に声をかけると、

「署長がきたときは、いつも貸切り、なぜならここは署長のマル秘会議室ですから」

「ねえ、立原さん」

と郷田が尋ねる。

「前から聞いたかったんだけど、〈帰路〉っていうのはもしかして、鎌倉在住の作家だった立原正秋先生の、最後の長篇からとったんじゃないのん。」

それからさあ、あなたもしかして、立原先生の親類縁者じゃないのん」

コーヒーはおかわり自由だから、カウンターに入りっぱなしの立原マスターは、そこから出て、テーブルの近くに来る。

「さすがは文学通の郷田探偵、と云いたいところですが、両方ともはずれ。」

ここは、山風署長よりもずっと以前に、僕のおふくろの時代に、かの麻暮正作先生の〈ゆきつけ〉だったんです。

もともと〈ロッキー〉という名の店だったんですが、ええ、おふくろが、映画の、

『ロッキー』

の大ファンで。

それを麻暮先生が、小町通りにカタカナ名の店は合わない、〈帰路〉にしなさいと。

生前おふくろは、麻暮先生ったら、ロッキーを逆に読んで帰路にしたのよ、なん

て云っていましたが、僕はそうは思っていない。

「ここは、苛酷な日々を続ける麻暮先生の、帰って来る場所だったのでしょ？」

このセリフに、金助が強く反応した。

「立原さん、あちきは麻暮先生の子分の、小林金助でやんすが、それでもここは知らなかった。

立原さん、ここになにか麻暮先生の形見みたいなものは、ありやしませんか？」

「形見ですか、形見というものでないかもしれませんが、二階の母の部屋はそのままになってますから、ちょっとお時間をいただければ」

立原は云って、階段の方へ向った。

金助は山風の方に向き直って、

「ところで署長、あの建物はいつ建ったんでやんすかねえ」

「未来計画カンパニーですか、あれは五年前に着工、四年前に完成したんです。

建物の半分は、海を埋め立てた上にあるんですから、膨大な経費がかかっているはず。

凄い数の重機と、凄い数の作業員が、現場に溢れていたっけ。

当時、どこの御大尽が建てたのか、半端な予算ではないなあと、ずいぶん話題になりましてねえ。

ただそれよりも、あんなお化けみたいなものが、一年で完成したことのほうに、地元の興味は移りましたがね」

「荒野なら、やるでしょうよ」

金助は云ってから、

「ところで郷田探偵、荒野の言葉の癖に気づきやせんでしたか？」

「ええ、ふふい、というあれね。

あれはおそらく、埴谷雄高という戦後文学の巨人の、

『死霊』

という小説のなかの会話が、元になっているんでしょうね。

荒野がいかにも好きそうな、哲学的小説で、哲学的会話ですからね。

あたしは、十回読んだけどさあ、解ったような解らないような。

ふふい」

郷田の言葉が終わるや否や、山風が声を発する。

「それにしても郷田さん、大変な文学通ですなあ。

さっきの正明さんにしても、こんどの埴輪さんにしても、いまやだれも知らんでしょ？」

「郷田郷という無名の作家が、あたしの父なのよ。

家には文学書がいっぱい、古今東西、古往今来の。いえ文学書の他はほとんど何もなかったわ。

でもそんなことより、あたしには、

『帰路』

とか、

『死霊』

が読まれないことのほうが悲しいわ。

荒野は読んでいるぶん、あたしにとって身近の人ってわけね」

郷田は微かに苦笑して、幾分冷めた三杯目のコーヒーを飲んだ。

「それは隅に置けませんねえ。

これから荒野退治を相談するはずなんでしょう」

山風はからかい気味に云った。

「それはそうなのね。

でも署長は、何も事件が起きなければ動けないって、立場ですよね」

「それはそうだが、こうしてお二人の話を聞いて、こうしてこの本をめくっていると、ほっとくわけにもいかないって気になってきますよ」

その言葉に金助は頷いて、

「あの建物の雰囲気は、内部で、サリンとか青酸カリとかV Xガスとかを作っている、なんら不思議はありませんやね」

このとき、マスターの立原が、二階から降りて来た。

「小林さん、見つかりましたよ、麻暮先生の色紙。

おそらくこれは、母のために、先生が書いてくれたものです」

立原がテーブルの上に置いた色紙には、まちがいなく麻暮正作の筆跡で、俳句らしきものがあり、簡単な絵が添えられてあった。

【復活す ある夏の夜 Dとボク】

「ある夏の夜とは、もしかして、今年のことじゃないでしょか。

それに、この絵、なんだか、竜宮城みたいじゃありませんか。

麻暮さんは予知能力もあったのですね」

郷田がつぶやき、金助は顔を紅潮させ、声を放った。

「麻暮先生が復活する、不死鳥のごとく。

そりゃそうさ、荒野が復活して、先生が復活しないわけはねえや」

「しかし、そうだとすると、どういう復活の仕方をするんでしょうかねん。

荒野みたいに、ロボット兼クローンなのかしら」

郷田は遠くを見る眼をした。

それから、金助と山風をかわるがわる見て、こう提案した。

「小林さんの身体に、あまり負担かけるわけにはいきませんわ。

今日はこれくらいにして、いかがでしょう、三日毎に、同じ時間、同じ場所で、三者会談ということで。

ですから、次は十日ね。

もちろん、都合がわるいときは二者会談、もしかすると、一人で暗中模索、試行錯誤なんてことも」

「そうしよう、いずれにしても、もっとたしかな情報が必要だね。

自分も昔とった杵柄で、一刑事として動いてみるかな」
山風が相槌を打ち、三人はそれぞれ握手を交わした。

八日、午前八時。

郷田狂介は、事務所内で筋トレをしている。
まだ衰えてはいない、いるわけではないと、自分に云い聞かせた。
これならいざというときは、木場完蔵直伝の合気道を駆使できるにちがいない。
小林金助は車椅子で、山風署長ももう若くはない。
郷田の筋トレは、いつにもまして熱がこもった。
スマホに電話が入った。
郷田は片手だけ鉄壺鈴を放して、画面を見た。
郷田いわく、
「葉山セレブ」
の榊奈々からだった。
「あら、奈々さま。
またまたご主人の浮気調査なのねん」
郷田が鼻にかかった声で出ると、奈々はもっと鼻にかかった声で、
「狂さまったら、さすがの主人だって、そういつもいつも浮気なんかあん。
今回は、娘のことよん。
娘の美々の彼氏のこと、調べてほしいのよん」
「だってだって、美々ちゃんは、まだ中学生でしょ」
「中学生だから心配なのよん。
妊娠でもされて、墮せる時期を過ぎでもしたら、どうしてくれるのよん」
「それはそれは、心配し過ぎね、考え過ぎね」
「狂さまったら、探偵さんらしくもない。
あら、もしかして、もっと大切な物件があるのかしらん」
そうよと云いたかったが、大切な顧客だ。
金払いのいい依頼人だ。
「その彼氏というのは、もしかしておじさまかしら。
でも、おこづかいいっぱいだから、援交する必要はないわね。
それならヤクザかしら。
ヤクザなら、あたし得意よ。
ダチもけっこういるしねえ」
「残念でした、おじさまでもヤクザでもないわよん。
美々は、気は優しくて力持ちなんて、わざとふるくさいこと云って、笑ってごまかしているけど。
ま、いまのところ、正体不明。

美々の口ぶりから、おじさまでもヤクザでもないけど、年齢不詳、職業不詳。
でなければ、狂さまにお願いしないわよん」
「正体つきとめたら、どうすりゃいいの。
別れさせるの、それとも彼氏を抹殺するの」
「そんな物騒なこと。
相手がだれだか、分かれば、それから先はご相談ね」
「わかったわ、奈々さま。
あとでメールで、美々ちゃんの写真と学校名と、できればメールやラインの内容、
まあかいつまんでね。
それから、好みのタイプかな。
たとえば、バンドリーダーの樹樹とか、イケメンタレントのYUKIOとか、ジ
ャニーズジュニアの金太郎とかさあ」
「できるだけでいいわ。
自慢じゃないけど、写真だけだって、あたしは動けるの。
いくら娘でも、知らないことのほうが多いのよん」
それはそうだ、自分だってそうだからと思いながら、はねっかえりの自分の娘の
ことをおもいながら、郷田はスマホを放り投げた。
それから、仕事始めの恒例として、三枚の写真を眺め、探偵十訓を唱えた。

八日、午後五時。

小林金助は、麻暮正作の色紙を見ている。
さっきから、矯めつ眇めつ見ている。
もしかすると、炙り出しかなんかになっていて、他にも麻暮のだんなの言葉が出
て来るんじゃないかと、そんなことも思っている。
しかしそれも叶わぬ期待とおもえて来た時、金助はもう一度色紙の文字を眺めた。

【復活す ある夏の夜 Dとボク】

そして金助は、漸くひとつのことに気づいたのである。
どうして、
「荒野とボク」
ではなく、
「Dとボク」
なのか。
五七五の問題じゃない、麻暮のだんなは字余りの人生を送ってきた人だ。
Dは、Dは、
「自殺請負所」

のことだ。

するてえと、麻暮のだんなは、自殺請負所の復活を予言していることになる。
ここで、金助は、自殺請負所と未来計画カンパニーを、頭の中で結び付けてみた。
すると、出て来た答は、

「姥捨山」

であった。

金助は、すぐにこういうメールを、郷田狂介に送った。

[自殺請負所+未来計画カンパニー=姥捨山]

そこに、タナカが入って来た。

「小林サン、今日ワタシ、コレデ失礼シテ、ヨロシイデショウカ」

派遣介護人は、午前八時から午後六時と定まっている。

しかし金助は、機嫌よく、

「タナカ君、珍しくデートかね。

いや、デートもする女性のロボットに、君という言い方はまずいかなあ」

「君デ、イイデス。

最近ハ、女性デモ、自分ヲ、僕、トイウ人、フエテイマスカラ」

「タナカ君、失礼だけど、初デートってやつだろう」

「ハイ、マア、ソウイウモノデス」

「それはそれは、いってらっしゃい。

おみやげは要らないから、あとでデートの話を聞かせてちょ」

金助は、タナカのデートの相手は、やっぱりロボットなのか、ロボットなら男のロボットなのか、なんてことを漠然とおもったが、タナカを冷やかしたりはしなかった。

手を振って見送った。

八日、午後六時。

郷田狂介は、湘南一の名門〈かまくら黒百合中学校〉の正門が見える場所に、BMWを停めて、もう三時間も、榊美々を待ち伏せしている。

きっと部活があるのだろう、と考えているから、慌てるふうはない。

ただ部活はもう十五年前から、午後五時までに終了させる事と定まったから、ちよっと草臥れ損かもしれないという結果も頭をよぎってはいた。

郷田は、さっき届いた、金助からのメールを思い出しながら、

「ぷふい。

深沢七郎の、

『檜山節考』

を、また再読しなくっちゃ」

とつぶやいた。

そうしたら、そのつぶやきが合図かのごとく、榊美々が出て来た。

セーラー服に、髪はうしろでまとめ、焦茶のリボンで結んでいる。

整形手術ばかりやっている、艶やかな母親とちがって、清楚な面だち。

よしっと指を鳴らし、郷田は車から降りて、後を尾けた。

念のために、度のない眼鏡をかけ、マスクをした。

十分ばかり歩いた美々は、江ノ電の駅とは反対の、鎌倉八幡宮の方面に進んで行く。

そして、小町通りに入る手前の、マクドナルドの前で立ち止り、スマホのメールを確認している風だった。

(これはもう彼氏と待ち合わせにちがいないわ)

自身を得た郷田は、頭の中の算盤をはじいた。

(榊奈々から幾らふんだくってやろうかしら)

走って、美々に近寄る者がいる。

あいつだなと思ったら、なんとタナカだった。

それなりにおしゃれをした、介護ロボットのタナカが、美々に近寄ると、美々は満面の笑み。

郷田はとりあえず隠し撮りをしたが、マクドナルドの店内に入っていくふたりを追いかけるはしなかった。

(こういう時代が、とうとう来てしまったのか)

としばし思いに耽った郷田は、これが未来計画カンパニーの、次の計画のひとつでないことを願った。

八日、午後九時。

郷田狂介は、鵜沼の事務所にいる。

山風署長から借りて来た、山内参三著、

『死んだる団』

のページをめくっている。

そこに、荒野大三郎あるいは川上宙衛門が、「自殺請負所」に、ひいては「死んだる団」に、人を誘い込む手口が、箇条書きで七項目書かれてあった。

【一、大物著名人の、子女に目をつける、なぜなら、親に対するコンプレックスが半端ではないから。

二、精神障害者に目をつける、なぜなら、殺人に対して罪悪感を持たないし、たとえ捕まっても障害者ゆえに裁かれないから。

三、苛酷な恋愛状況に陥っている、男女に目をつける、なぜなら、突拍子もない

行動ができる精神状態にあるから。

四、占いを信じたりスピリチュアルな世界に関心が強い者に目をつける、なぜなら、洗脳を受けやすいから。

五、重い持病を持つ者に目をつける、なぜなら、自棄糞になりやすいから。

六、高学歴者に目をつける、なぜなら、小さな事で挫折するから。

七、超早熟の少年少女に目をつける、なぜなら、一般倫理に沿わない行動をするから】

ううむと郷田は腕を組む。

一、三、六、七は、完全に合致する。

残りの二、四、五だって、調査すれば、合致しないともかぎらない。

そのとき、榊奈々から電話が入った。

「あら、奈々さま、遅かったじゃない、待ってたわ。

送った写真、見てくれたのね」

「とっくに、とっくに見たわよ。

でも、信じられないし、信じたくないし、頭の中が、ままま、真っ白になっちゃってえ」

「髪が真っ白にならなかつただけ、いいんじゃない。

そんな時間があったら、調査料振り込んでくれればいいじゃないの」

「夜間は手数料がかかるのよん。

それにねえ、ありがたくない結果には、お金払いたくないものよね」

「それは考え次第ね。

だってさ、相手がヤンキーとか、オカマとかじゃなかつただけ、ましでしょ」

「ましの、ロボットがましののお。

狂さまったら、ロボットなんかの味方なののお」

「なんか、なんかなんて云うと、差別だって叱られるわよん。

いまやロボットは、人間と同じ立場でしょ。

マイカードも持ってるし、運転免許や調理師免許だって、持ってるロボットもいるのよ」

「いやいや、厭な世の中ねえ。

狂さま、なんとかしてくんない。

なんとかしてくれりゃ、調査料はいつもの十倍よん」

(ロボットたちが、ロボットの人権、いや、ロボット権を勝ち取ったのは、おそらく荒野の陰の力にちがいない。

それなら荒野を倒せば、なんとかなるかもしれない)

ふと郷田は、そんなことを思ったが、奈々には告げなかった。

「とにかく、あたしが会ったかぎりでは、タナカ君は、いい人間、いえ、いいロボットよ。

当面、美々ちゃんは心配要らないわ」

「当面、当面って、なによ」

その間いに対しても、返事をしなかった。

荒野の正体を話しても、余計な不安を与えるだけなのだから。

「当面、どうしましょうか、奈々さま。

タナカ君を抹殺してもいいけど、そんなことして、美々ちゃんに自殺でもされたらねえ」

そう郷田が云うと、奈々は黙した。

それをいいことに、郷田は電話を切った。

だが、思いなおして、奈々にすぐ電話をした。

「奈々さま、美々ちゃんと、少しだけ話させてもらっていいかしら」

「ばれちゃうけど、このさい、まあしかたないわね。

でもさあ、狂さま、気分を害さないでね」

郷田には何となく意味が解った。

しばらくして、奈々のスマホが美々に渡ったらしく、

「もしもし、ぼく美々だけど」

まさしく女子中学生の声だ。

「ぼく」は変だけど、郷田も人のことは云えない。

「あたしは、探偵の郷田狂介よ」

「探偵さんが、ぼくに何の用かな」

「美々ちゃんとタナカ君は、どういう関係なのでしょう」

「ああ、ママが依頼したんだな。

まったく、親の愛情なんか、百でなければゼロがいいな」

「あたしもそう思うけどさあ、ママは百。

美々ちゃんとしては、答えたくなければ、いいのよ」

と云うと、何の反応もなく電話は切られた。

べつだん気分は害さなかった。

九日、午前九時。

郷田狂介は、探偵事務所の二階で朝食をとっている。

昨夜おそく、恒例のランニングのついでに、コンビニで買って来た野菜サンドと、低脂肪牛乳。

仕事始めの恒例は、すでに済ませた。

牛乳を飲みながら郷田は、小林金助からのメールをあらためて見る。

[自殺請負所+未来計画カンパニー=姥捨山]

この単純な計算式のなかに、女子中学生の美々に入る余地があるとは思われない。

それに、あの純朴なロボットタナカが、荒野の指示を受けて美々と付き合っているとも思われない。

だが、だが、だが、だが、山内参三の、

『死んだる団』

を読むかぎり、その「思われない」ことを仕組むのが、荒野大三郎なのだ。

郷田は明日十日が来るのが待ち遠しくなった。

同時に怖くもあった。

いずれにしても、小林金助氏及び山風署長とじっくり相談しなければならない。

その前に、別の野暮な仕事を、三件ばかりこなさなければならない。

九日、正午。

未来コスモス院の自室で小林金助は、タナカが運んで来る昼食を待っている。

寝過ごして朝食をとらなかったので、腹がすいた。

厭な夢を見た。

麻暮正作と荒野大三郎が命がけの闘いをしている。

ふたりとも必死の形相である。

優劣つけがたい闘いで、上になったり下になったり、右になったり左になったりしている。

ふたりがめまぐるしく回転し始めると、どちらがどちらか解らなくなる。

そのうちふたりの顔も身体も重なって溶け、再び固まったときには、ふたりの混合の顔と身体がふたつ、そこにある。

それから、まるで双子のふたりは再び闘い始める。

どちらに味方していいか分からず、頭が混乱して、混乱の果てに絶叫して目が覚めた。

タナカが入って来た。

今日の昼食は、マクドナルドのハンバーガーだった。

「なんじゃこれ」

金助が文句を言うと、

「小林サン、健忘症デスカ。」

「コレタベタイッテ、ウルサカッタデショウ」

「それは、先週の話だよ。」

「いまはスパゲッティが食べたいなあ」

「ワザワザ昨日カッタキテ、今チンシタノデス。」

「ドウゾ、ヨロコンデ、タベテクダサイ」

「なんじゃ、昨日買ったんか。」

「どうりで変な臭いがするぜ」

「アラマ、ワタシハ、ニオイガ、ワカリマセン。」

新機種ノロボットナラ、ニオイモ大丈夫デスガ」
「いいよ、タナカ君が新機種に代わられても困る。
これ、ありがたくいただきませ」
「小林サン、ヤサシイカラ、スキデス」
「あちきにお世辞を云っても、なんにもでないぜ。
それよりも、タナカ君、昨日のデート、どうだったかい」
「ドウダッタデショウ」
「へへへ、ご想像におまかせしますかい。
相手はどここのイケメンだい」
「小林サンホド、二枚目デハアリマセン」
「なんじゃ、またお世辞かい。
まあいい、このハンバーグ、うめえなあ」

九日、午後三時。

小林金助は、未来コスモス院のロビーで、巨大液晶テレビを眺めている。
また、地震のニュース。
震源地は千葉県銚子沖で、鎌倉は震度3。
今年に入って、すでに三十三回目の地震だと、アナウンサーが云っている。
新・関東大震災が先か、あちきが死ぬのが先か、なんてことを思っていると、郷田狂介からメールが入った。

[昨日私の依頼人の娘がデートしました／相手はあなたの担当のタナカ君です／何か変わったことはありませんでしたか？／小林さんへ郷田より]

[ホントに娘さんですか？／実はタナカ君は女のロボットでっせ／本人もデートに否定はしていなかったが／郷田さんへ小林より]

[ええっ！女ですか／そうなるとどうなるんでしょうね]

[もしかしてデート場所はマクドナルドですかい？]

[さすがによくごぞんじで／すくなくとも待ち合わせ場所はマクドナルドでした]

[同性のおしゃべり会ってやつかな？]

[それならそれでいいんですけど]

[あちきがちょいと探ってみましょうか？]

[それはまだけっこうです／荒野に勘付かれないし]

[了解！／何か変わったことがあれば明日報告しまっせ]

[よろしく願います！／それでは明日]

九日、午後四時。

郷田狂介は事務所で思案している。

思案しても答は出ず、榊奈々に電話を入れた。

「なあに、狂さま」

「奈々さま、美々ちゃんの相手のロボットですけど、女なんですって」

「おおお、女なの。でも、ロボットに性別なんかあるのかしらん」

「それがあるのよ。

ただ美々ちゃんが、そのことを知っているのかどうかは、あたしには解らないわ」

「まさか、レスビアンじゃないわよねん」

「心配したらきりがありませんよ。

ロボットが男でなかっただけ、ましだと思いませんとねえ」

「狂さまは、ましまし探偵ね。

ましで解決なら、探偵なんかに頼まないわよん」

「それもそうですね。

とにかくあたしとしては、一度しつこく尾行しようって思っているのよ」

「やっとその気になってくれたのねん。

すっぼんの狂さま、お願いね」

すっぼんと云われて気分を害した郷田は、電話を切った。

それから、煙草を喫いながら、物思いに耽っていると、今度は榊奈々から電話が来た。

「狂さま、たたた、たいへん」

声が鼻にかかっている。

「何なのよ、大変変な声出してえ」

「美々が失踪したの」

「疾走って、どこに走っていったのかしら」

「疾走じゃない、失踪よ、行方不明」

「そんなこと、どうして解るのよ」

「美々に、今月からSP付けているのよ」

「SPが怪しいわね」

「総理大臣のSPまでやった人よ。
彼を疑うくらいなら、狂さまを疑うわ」
「早すぎる、早すぎる」
「だれが早漏なの」
「冗談云ってる場合じゃないわ。
あたしの想定より、敵の動きが早い。
しかも一年も早い」
「だれが敵なの」
「美々ちゃんを拉致したやつよ」
「美々は失踪ではなく、拉致なのね」
奈々の声がうわずった。
「おそらく、たぶん、まちがいなく」
郷田はタナカを思い浮かべ、荒野を思い浮かべた。
「いったい、誰なのよお」
「まだ云えないけど、あたしに任せて。
必ず美々ちゃんを助け出すから」
「おおおお願いよ、狂さまああああ」
奈々の泣き声がスマホを揺らす。
「ええ、約束するわ」
郷田は腹筋に力を入れた。

(第五章、了)